7/13(月)高め合いの授業研究会 愛知教育大学の鈴木健二先生からの指導のポイント

今回、暑い日の午後の60分授業。児童は、よくついてきたなと思う。うまく担任と児童がつながっているんだと思った。

① 切実な問題として子どもは意識しているか

公園にゴミが落ちていることがどれほど重要な問題だと感じているのか。深刻な問題だと感じているのだろうか。アホウドリの問題は特別な例であって、甚目寺の町はそれほど深刻なのだろうか気がなった。

テーマを決めて、具体的なことを書けと言われれば書くだらうが、活動したい内容になっているかが大切である。本気度が低いと、活動は薄いもので終わる。この活動が何につながるのか、目的は何か。

② やらせようとすることが形式的すぎないか

ポイ捨て一つとっても、「誰がいつ捨てるのか」「捨てる人はどう思っているのか」こういった具体的な原因や心情をあぶり出しているのか、そうでなくても教師が甚目寺のゴミ問題について、調べて見えている事が大切である。そうすればアプローチの仕方が違ってくるはずである。

③ 児童が甚目寺のゴミ問題の何が問題で、自分たちは何が出来るかを整理しよう

出るゴミ	問題点	解決に向けて
家	分別のモラル	
事業所	分別のモラル	
ポイ捨て（公園）	小学生以外がポイ捨て？	
ポイ捨て（道路）	車が多い。	

どの部分を考えていきたいかが整理されていないと、曖昧になりやすい。

④ 入り口を狭く、出口を広く

今日の研究授業でも、いろいろな班の意見は、テーマが違うので参考にしにくい。テーマが違ってくると、アプローチの仕方が違ってくる。

共通課題を決めて（入り口を狭く）、それに向けた解決策を出させたり、問題点を出させたりする。それがポイ捨てであってもよい。その課題解決で学んだ手法を生かして、個々の問題を調べいく方法がよく使われる（出口を広く）。調べる方法も、どうしても個に返すと、得意な方法になってしまうので、インタビューをした人は、次は、インターネットで調べるなど、違う方法にするようアドバイスした方がよい。

⑤ インタビューの際に

相手から何を引き出すかが重要である。聞くからには、問題意識をもってインタビューをしないといけない。

例えば、三河で研究授業を見たときに、同じ公園のゴミ問題に対して、ゲストティーチャーで来た人が言った言葉がすごくインパクトがあった。公園を管理している人だったが、「三河の公園はホッとさせる。他の地区はひどい」つまり、使う人のモラルが高いということだが、こういう言葉は使える。ホッとさせたと言ってもらえる公園な

のか、その人ならではの言葉が引き出せた時に、インパクトを与える。 2学期からの活動が深くなる。

⑥ よいことを取り上げることも子どものやる気につながる

ポイ捨てに対して、切実な問題がないことが、逆に子どものやる気に火をつけることだってある。甚目寺は、自然があり、お寺があり、よい雰囲気である。「何も問題がないことがすばらしい」「住みやすい町であることがすばらしい」ならば、「もっとよくしていけるのでは」「このままでよいのか」から、いろんな提案ができる。子ども達は本気になる。

⑦ 提案してみよう

「甚目寺は道路がせまいのに、車の通りが多い。では、どこに通すのか。よりよいまち作りを考えてみよう」という提案型の授業は、子どもの調べる意欲をかき立てる。提案をすることで、深く知ることにつながる。そういったアプローチの仕方があってもよい。

⑧ 子ども任せでは高められない

高めるためには、教師が手をかけ、しかけなければならない。ある意見に注目させたり、比較させたりしなければならない。低中高で手のかけ方に違いが出てくるはずである。また、年数をかけると自分たちで出来るようになってくる。そうした教師の出方具合の共通理解が今後必要となってくる。

シンキングツールはそれだけでは、ただ分類しただけである。材料の宝庫であるシンキングツールをどう扱うかが甚目寺小の課題である。